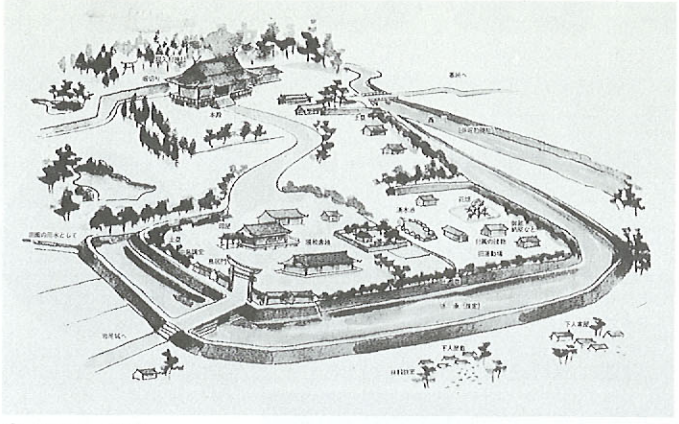


肥後歴史散歩

戦国時代の明と暗

阿蘇惟長と惟豊



①「濱の館」復元図



② 惟豊の居城濱の館跡（県立矢部高校内）。昭和49年に発掘調査が行われ、数棟分の館の礎石や庭園などの遺構が確認された。



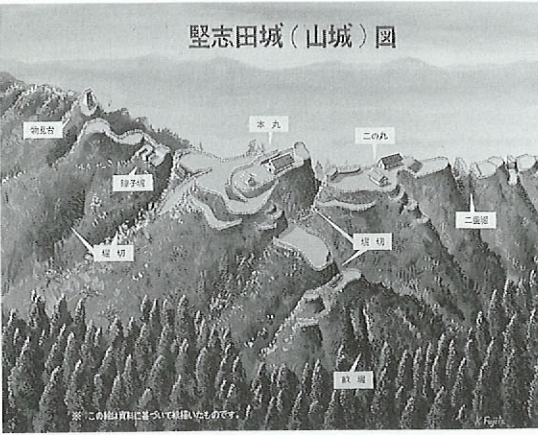
③ 濱の館から出土した三彩鳥型水注。「交趾三彩」と呼ばれ、中国南部で明代に焼かれた陶器。このほかにも黄金のべ板や白磁小置物など21点の宝物が発掘され、歴史的重要性からそのすべてが国指定重要文化財となった。



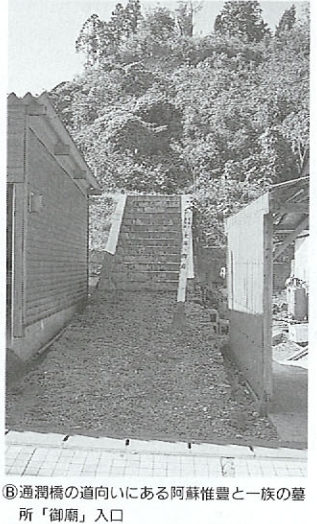
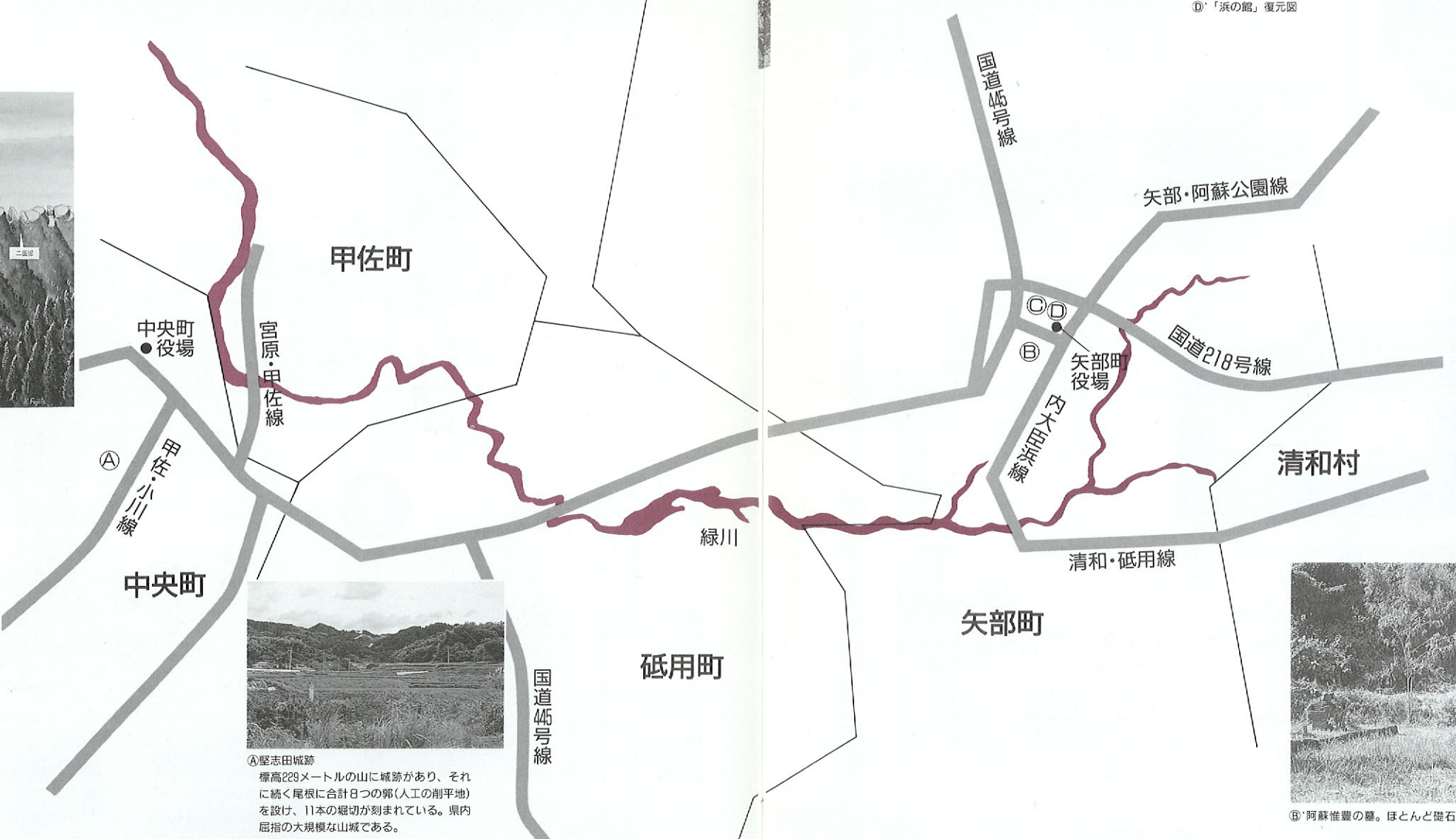
④ 阿蘇家の菩提寺福王寺。惟長、惟豊をはじめ阿蘇氏の位牌7つが納められている。

た人物、それが阿蘇惟長である。永正二年（一五〇六）、菊池家臣団が二十二代政隆を排斥。重臣八十四名の署名をもって惟長に菊池家相続を要請した。惟長は豊後守護大友親治の後盾もあり、菊池武経と称し肥後守護となった。

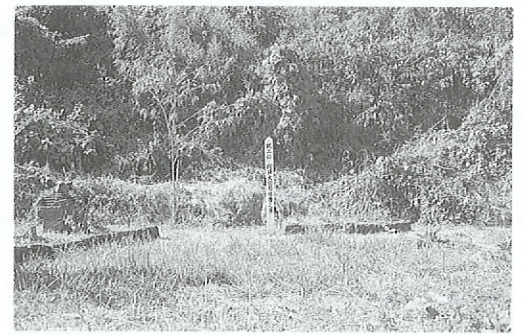
菊池に入った惟長であるが、城・赤星・木野・隈部といった一族の勢力が強大で、本家の所領は自分の意にならず、阿蘇家領の半分にもならなかった。



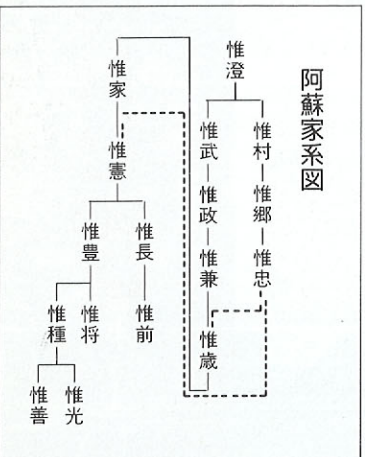
⑤ 堅志田城の復元図



⑥ 通洞橋の道向いにある阿蘇惟豊と一族の墓所「御願」入口



⑦ 阿蘇惟豊の墓。ほとんど礎石だけになっている。



阿蘇家系図

元中九年（一三九二）、南北朝合一が成り、室町幕府の全国統一が完成しました。しかし、征西府の置かれていた九州では戦乱落ち着かず、多くの氏族が覇権や家督を争い続けていました。阿蘇一族もまた、個々の思惑が交錯し数々の内紛を生んでいます。地位と権力を求めながら遂にそれを得ることができなかった惟長。自らの本分を貫いた弟惟豊。今回は、戦国の世に明暗を分けた兄弟の足跡を訪ねました。

室町・戦国時代の阿蘇氏

勤皇の忠臣阿蘇惟澄のあと、阿蘇家は北朝方大宮司惟村（益城郡を支配）と南朝方大宮司惟武（阿蘇郡を支配）が対立。三代の間確執が続いたが、宝徳三年（一四五二）惟村系の惟忠が惟武系の惟歳を養子に迎え、一応の統一を見た。しかし確執の種は残り、文明十七年（一四八五）の菊池重朝と宇土為光との合戦で、惟忠の子惟憲が宇土側、惟歳の子惟家が菊池側に分かれて争った（幕の平合戦）。結果、惟憲が勝利。矢部浜の館を根拠に益城・阿蘇両郡を支配するにいたった。そして、衰退した菊池氏に代わって菊池に入り肥後守護となった惟憲の子惟長と弟惟豊の家督争いを経て、阿蘇家内部は平穏な時代を迎えた。

その後、大友氏、龍造寺氏、島津氏の九州三大勢力の中で巧みに領国を維持してきた阿蘇氏であったが、天正十三年（一五八五）、幼主惟光が島津勢に追われて浜の館を放棄。事実上阿蘇氏の大宮司時代が終焉した。肥後守護を狙った惟長

益城・阿蘇を統合し、威勢を誇る阿蘇家内で、より以上の権力を追い求め

後悔はなほだしい惟長は、驕奢・暴悪な行為に走り、享楽を求め、忠臣の忠言も退けるありさまだった。そのため菊池家老臣をはじめ国中ことごとく憤慨し、城内には不穏な気が高まり、惟長は矢部に逃げ帰ってしまった。

より強大な権力を夢みた惟長であったが、名目ばかりで実権を与えられずついに夢破れたのであった。

帰郷した惟長と弟惟豊

さて、惟長が菊池へ入った後、阿蘇大宮司となったのは弟の惟豊である。矢部浜の館において益城・阿蘇の広大な領地を支配していた。

菊池から逃げ帰った惟長は、大宮司職を奪おうと企て、二度の争いにより惟豊を追い落とし、子の惟前を大宮司に就けた。

日向国鞍岡に逃れ潜んでいた惟豊は、臥薪嘗胆の日々数年。永正十四年（一五一七）、鞍岡の豪士甲斐親宣（菊池十代武房の第三子武本の末裔）の力を借りて日向より兵を挙げ、一気に惟長惟前父子を浜の館から追い出した。こうして惟豊は矢部に戻り、益城・阿蘇地方の覇権を回復した。一方惟長は薩摩に敗走。相良氏を頼り、罪を謝し、以後本宗に背かない旨の血書をもって許され、甲佐城に潜居した。その後堅志田城に移り、二度と所領治政の表舞台に立つことなくこの世を去った。

（参考文献）
『動皇阿蘇家の活躍と矢部史話』 卯野木卯一良著

■お詫びと訂正
本誌十月号に次のとおり誤りがありました。お詫びして訂正いたします。
写真キャプションのアルファベット
①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳